

# 終助詞「じゃない」の意味と用法

三 枝 令 子

## 1. 「じゃない」の終助詞における位置づけ

仁田 (1989) は、日本語の文の基本構造を〈言表事態〉と〈言表態度〉という二つの層に分け、さらに、言表態度を形成するモダリティを〈言表態度めあてのモダリティ〉〈発話・伝達のモダリティ〉に分け、後者の要件として「発話時」「話し手の立場からした」の二点をあげた。次の例にあるように、会話において〈発話・伝達のモダリティ〉の存在しない文は不自然である。

(1) 先生：李さんはどこに住んでるの？

学生：国分寺です。

先生：じゃあ大学に近くて便利です>(\*Ø/ね)。

では、〈発話・伝達のモダリティ〉を表す形式にはどんなものがあるだろうか。次は映画のシナリオ「シコふんじゃった」の一節だが、様々な形式が用いられている。

久美「レポーターか。とりあえずテレビ局でも行ってみたら」

沙織「うちの大学の先輩、みーんな軽いアナウンサーだからな。アテになん  
のかな。久美決まった?」

久美「まだ」

秋平「オレ、決まり」

沙織「どこ?」

秋平「一流企業とだけお伝えしておきましょう」

久美「どうせ伯父さんのコネじゃない」

秋平「なんで知ってんの?」

久美「冷蔵庫に聞いたもん」

秋平「相変わらず口の軽い奴だな」

久美「内の大学出てそんなとこ行っただって入ってから苦勞するだけよ」

沙織「ねえ、そんなとこって、どこよ？ どこに決まったの？」

久美「聞かない方が幸せだって。もし聞いたら呪い殺したくなるから。あ、そう  
だ、ねえ研究室行った？」

上の会話文の文末には次のようなものが用いられている。バリエーションを見ることが目的なので、分類の基準は統一的ではない。

提案 (たら)

理由 (から)

伝聞 (って)

宣言

疑問 (か, の, かな, 上昇イントネーション, 疑問詞)

応答

終助詞 (じゃない, もん, な, よ)

日本語の文は、客観的なことがらを表す部分と話し手の立場を表す部分とからなっている。時枝 (1950) は、客体的概念的表現を「詞」、話し手の立場の表現を「辞」と呼び、詞と辞が結合して句を構成することを指摘した。仁田 (1989) では「言表事態」「言表態度」という言葉が使われているが、日本語が質的に異なる二つの層からなることを述べる点では変わらない。さて、この言表態度を表すものが何かとなるとこの線引きについてはいろいろな立場がある。また、同じ形式が「詞」であると同時に「辞」であるものもある。活用形がその典型で、例えば「食べる」という動詞の活用形が文末で「ちゃんと食べる!」「早く食べた!」「ここでは食べない!」のようにモダリティを伴うことが珍しくない。後で触れる否定疑問の「面白いと思わない?」もモダリティ表現である。上にあげたシナリオの文末表現の中では「たら」「から」が「詞」であると同時に「辞」である例と言える。「たら」「から」は接続助詞(「たら」は活用形の一部と考えることができる)として用いられるが、同時に理由を表さない「から」や提案の「たら」と呼ばれる用法もある(例えば、白川 (1995) (1996))<sup>(1)</sup>。

ここで取り上げる「じゃない」も活用形でもあり、文末で「言表態度」を表すものとしても用いられる。近年「じゃない」「だろ」の終助詞性に注目した研究がなされている(鄭 (1994), 蓮沼 (1995), 三宅 (1996), 宮崎 (1996) など)。「じゃない」、また、三枝 (2003) で取り上げた「だろ」が他の終助詞と違う点は、これらの文末表現

が叙述性を持つことである。「じゃない」「だろ」が「言表事態」にかかわる叙述用法を持ちながら、しかし同時に「言表態度」を表す用法を持つことは当然その終助詞としての意味・用法にも影響すると考えられる。本稿ではその点に留意しながら「じゃない」の用法を考えていきたい。

なお、「でしょ」「じゃない」の形には、実際には次のようにいくつかのバリエーションがある。

じゃ／では、じゃない、じゃん、じゃないか、じゃないの、じゃんか、  
 じゃない／ではないですか、じゃ／ではありませんか

上のバリエーションのうち、「じゃないか、じゃんか」は、男性がもっぱら用いる。ここではこれらを総称して「じゃない」と呼び、必要に応じて形の違いに触れる。

## 2. 「じゃない」の意味と構造

### 2.1 否定疑問用法

「じゃない」は、もともとは名詞述語「だ」の否定形である。

- (2) 私は学生じゃない。  
 (3) 遊びに行くんじゃない。

「じゃない」は用言の活用形という点で動詞、形容詞の否定形「行かない」「おいしくない」と同列に並ぶものである。次の(4) B の名詞述語用法が上昇調で疑問文として発話される時は、否定の意味を残すから「じゃない」の「な」にストレスが置かれ、イントネーションはいったん下がってまた上がる。この場合は問い返しを表す。

- (4) A: あそこに見えるのは実は魚じゃないんだ。  
 B: あれは魚じゃない。  
 A: うん、魚じゃないんだ。

名詞述語用法の「じゃない」は否定の意味を保持しているが、次の(5) A の否定疑問用法は否定の意味を持たない。

- (5) 〈池の中を見ながら〉  
 A: ねえ見て。あそこにいるの、あれ魚じゃない。

B: うん, 魚だね。

話し手は(5)では対象を「魚だ」と思っている。これは否定の形をした疑問で、「あれ魚?」という直接の疑問文より迂言的なため丁寧な印象を与える。否定疑問用法は、「じゃない」だけでなく、動詞、形容詞にもある。

(6) <クッキーを食べながら>

A: この店のクッキーすごくおいしくない。

B: うん, おいしいね。

(7) 彼, 去年北海道に行かなかった。

ただし、動詞のル形を否定形にすると、「北海道に行かない?」と勧誘の意味になる。そこで動詞の場合は「北海道に行かないの?」と「の」をつける。名詞、ナ形容詞の場合には「じゃない」が用いられるため、以下に述べる確認用法と形が同じになる。

文末で用いられる「じゃない」は、先の否定疑問用法を別にして、次の三つ、1. 確認用法 2. 強め用法 3. 気付かせ用法 に大きく分けることができる。これは発話の際のイントネーション、「の」の有無、意味の違いによって区別される。「の」の有無についていえば、上昇調の場合には、動詞、イ形容詞の後ろには「の」がつき、下降調にはそうした制限はない。すなわち、上昇調では体言にしか接続せず、下降調は体言にも用言にも接続する。次に「の」の有無一覧を示す。右側に後に触れる「でしょ」についても載せる。

|        | じゃない           | でしょ         |
|--------|----------------|-------------|
| 上昇調    | 確認             | 確認          |
| 彼持っている | * じゃない / んじゃない | でしょ / んでしょ  |
| それ高い   | * じゃない / んじゃない | でしょ / んでしょ  |
| それ有名   | じゃない / なんじゃない  | でしょ / なんでしょ |
| それ紙    | じゃない / なんじゃない  | でしょ / なんでしょ |
| 下降調    | 強め             | 押しつけ        |
| 彼持っている | じゃない / んじゃない   | でしょ / んでしょ  |
| それ高い   | じゃない / んじゃない   | でしょ / んでしょ  |
| それ有名   | じゃない / なんじゃない  | でしょ / なんでしょ |
| それ紙    | じゃない / なんじゃない  | でしょ / なんでしょ |

|         |             |           |
|---------|-------------|-----------|
| 上昇調／下降調 | 気づかせ        | 気づかせ      |
| ある      | じゃない／*んじゃない | でしょ／*んでしょ |

次にそれぞれの用法を見ていくことにする。

## 2. 2 確認用法

次のような例が確認用法に当たる。

- (8) A: このままだと、地球温暖化はもっとひどくなる(\*じゃない／んじゃない)ノ。  
B: ぼくもそう思う。
- (9) <北海道の人に電話して>  
北海道はもう寒い(\*じゃない／んじゃない)ノ。
- (10) ……浅見さんは本職のお仕事の方がお忙しいんじゃないありませんかノ。(蜃気楼)
- (11) A: クレジットカード作るのに、身分証明書が必要(じゃない／なんじゃない)ノ。  
B: そうだろうね。
- (12) 田中さんは親切(じゃない／なんじゃない)ノ。
- (13) A: ねえ、あそこに泳いでいるの、もしかしてイルカじゃないノ。  
B: そうかな。よくわかんないな。

名詞、ナ形容詞の場合は、その「じゃない」が否定疑問用法か確認用法か形だけではわからないが、「なんじゃない」となれば確認用法であることが明らかになる。確認用法の場合は、話し手は命題内容について確信がない。次のように様態を表す「そうだ」は確認用法では用いることができない。

- (14) \*田中さんは親切そうなんじゃない？

「田中さんは親切そうじゃない？」は否定疑問用法である。命題の内容を確認する確認用法は、すべての活用形に接続する。

- (15) 彼、北海道に行くんじゃない？  
(16) 彼、北海道に行ったんじゃない？  
(17) この店のクッキーおいしいんじゃない？

名詞、ナ形容詞の場合は「じゃない」と「なんじゃない」の両形があるが、意味の違いはわずかである。後者は、見たり聞いたりしたこれまでの流れを取り込んでの判断

を確認すると言える。

否定疑問用法は、形は疑問形だが不定の意味合いはないから「じゃない」を「かな」「かしら」で言い換えられない。一方、確認用法は話し手に確信がないから「じゃない」を「かな」「かしら」で言い換えられ、また、「の／（の）か」が付加する。さらに「ではないか」のタ形「ではなかったか」が可能である。先の表に示したように、動詞、イ形容詞の後ろには「の」がついて、名詞と同じような形になる。ナ形容詞、名詞は、「の」があってもなくてもいいことから、確認用法の「じゃない」は叙述としての働きもある次のような構造だと考えられる。

|                       |   |       |
|-----------------------|---|-------|
| A が B する<br>A が B だ→な | の | じゃないノ |
| A が B                 |   |       |

ここでは、「じゃない」に否定の意味合いが若干残っているが、次の強め用法では、否定の意味合いはまったくない。

### 2. 3 強め用法

次のような例が強め用法にあたる。

- (18) ありがた迷惑ということだってあるじゃないですか。 (蜷気楼)
- (19) A: 計算, 終わりました。  
B: この計算, 間違ってる (じゃないか/んじゃないか) 。直しておいて下さい。
- (20) いずれにしても, 一千万円の価値のあるマーケットをみすみす見ず知らずの人に奪われるのは悔しいじゃないですか。 (蜷気楼)
- (21) A: 田中さん, ○○大学に合格したんだって。  
B: 彼そんなにできたんだ。すごい (じゃん/んじゃん) 。
- (22) あなたの家はここから近い (じゃない/んじゃない) 。
- (23) 安全という話だったけど, 実は危険 (じゃないですか/なんじゃないですか) 。
- (24) 私が言ったように, 証明書もらうには身分を証明するものが必要 (じゃない/なんじゃない) 。
- (25) A: ビール飲んでもいい?  
B: まだ中学生 (じゃない/なんじゃない) 。

(26) A: 会議が始まるよ。

B: えっ、今から? <手帳をみて> 何言ってるの。5時から(じゃない/なんじゃない) \。

「じゃない」は、話し手の判断を直接形ではなく否定形を用いることによって強めている。なぜ強めて言う必要があるかといえば、聞き手の言動、目の前の現実と話し手の考え、予想とがくい違っているからだと言えよう。この予想外という思いは、驚きのこともあれば、反発や不満、聞き手に反論する気持ちとなって表現されることもある。そこで、次の(27)(28)のようにその場で気付いたことを予想と照らし合わせることなくそのまま述べる場合には「じゃない」を用いない。

(27) A: 林さん、亡くなったんだって。

B: え、本当? 信じられない。

A: 人間て、いつ何が起こるかわからない(\*じゃない/ね)。

(28) A: あ、山田さん(\*じゃない/ø), 席はここですよ, ここ。

B: ああ、ここでした。迷ってしまって。

(29) A: あら、山田さん(じゃない/ø), お久しぶり。

B: お元気ですか。

「じゃない」は、話し手の意思を宣言するような場合には、例(30)(31)のように意志、願望を表す表現に接続する。また、(32)のように根拠に基づく推測にも接続する。

(30) やってみようじゃない。

(31) 行ってみたいじゃない。

(32) 行くらしい/そう/ようじゃない。

この下降調の「強め」の場合は「じゃない」が「Bする・Bだ」という用言の後ろに直接つくことから、終助詞と同じように機能していると考えられる。

## 2.4 書き言葉の「ではないか」

話し言葉の普通体では「か」の使い方に男性女性による使い分けがあることから、「じゃないか」ではなく男女共通の「じゃない」が基本的な形と言えよう。しかし、イントネーションが示されない書き言葉では「ではないか」と「か」が必要である。書き言葉でも「この政策は間違っているではないか。」と、「ではないか」が動詞、イ形

容詞に接続する場合は強めの働きをするが、「のではないか」は、文脈によって強める働きをする場合と、否定形が書き手の主張をやわらげる働きをする場合がある。

- (33) フリーターにかかわる社会的な問題は、年金や保険の担い手になっていない点なのではないか。
- (34) 名前は人がその字を読んで読めることを第一に考えるべきなのではないか。

## 2. 5 気付かせ用法

「じゃない」には、話し手が聞き手の忘れていること、気づいていないことを気づかせる用法がある。「気付かせ」の「じゃない」は存在を表す動詞に付くことが多い。この用法は3節で触れる「でしょ」にもあり、言い換えが可能である。

- (35) あそこに歩道橋が見える(じゃない/でしょ)ノ。晴れた日は、あそこから富士山が見えるんだ。
- (36) A: 私たちのクラスに中村って子いた(じゃない/でしょ)ノ。  
B: 背が高かった?  
A: そう、彼、今モデルしているんだって。
- (37) そこに赤いボールペンがある(じゃない/でしょ)ノ。取ってくれる?
- (38) A: 会議は何曜だった?  
B: 今日が火曜(じゃない/でしよう)ノ、だから木曜ね。

こうした用法を「じゃない」の3番目の用法としてわざわざたてるのは「じゃない」のふるまいが特別だからである。「じゃない」を上昇調に発話するときには、動詞、イ形容詞には「の」を付加して名詞化することが必要だが、この用法では「の」を必要としない。話し手が「の」によってことがらを客観化して聞き手に確認するのではなく、現に話し手、聞き手の目の前にあるもの、共通の記憶にあるはずのもの、共通に想定できるものが対象のため、話し手が聞き手に気づかせつつ確認する意味になると考えられる。また、ここでの上昇調は、話し手が発話をこれで言い終わらず、話を先へ進める働きを持っている上昇調であることが特徴的である。

この気付かせ用法は、肯定の答えを期待している点で否定疑問用法に近い。上の(35)は、否定疑問なら「あそこに歩道橋が見えない。」となるが、名詞、ナ形容詞の場合には「あれ、歩道橋じゃない。」と形も同じである。



## 3. 「じゃない」と「だろ/でしょ」

「じゃない」と「だろ/でしょ」は、もともと叙述性があるという点では共通している。使い方の上でもきわめて近く、次のように言い換えられる場合が多い。下の引用例(40)~(42)の( )内は左側が原文である。

- (39) 夫：ただいま。  
 妻：こんなに遅くなるのに、どうして電話をくれなかったの。  
 夫：ごめん。  
 妻：遅くなるときは電話ちょうだいって、いつも言ってる(じゃない/でしょ)↘。
- (40) 湯本さんのほうが浅見さんにはピッタリかもしれんな。けど、まあいい(じゃないか/でしょ)、たとえばの話なんだから。(ユタ)
- (41) A：ふーん、本当ですか。  
 B：本当ですよ。嘘をついたってしょうがない(じゃないですか/でしょう)。(ユタ)
- (42) A：その代わり、今後はちゃんと、私を女性として扱ってくださいね。  
 B：当然(でしょう/じゃないですか)。十分、女性として尊敬していますよ。(ユタ)

しかし、常に言い換えられるわけではない。上昇調、下降調の「でしょ」「じゃない」はどこに違いがあるのだろうか。まず、明らかに言い換えができない場合から考えてみたい。下降調で言い換えができないのは次のような例である。

- (43) 君、最近顔色が悪い(じゃん/\*だろ)↘。  
 (44) 田中さん、そのコート似合っている(じゃない/\*でしょ)↘。  
 (45) A：ひさしぶりです。  
 B：具合悪いって聞いてたけど、元気そう(じゃない/\*でしょ)↘。  
 (46) 山田さん、おなか空いた(\*じゃない/でしょ)↘。  
 (47) あなた、朝早かったから眠い(\*じゃない/でしょ)↘。

聞き手について述べる場合、聞き手の様子を述べる表現(例(43)~(45))には「だろ/でしょ」が使えず、聞き手の感情を表す表現(例(46)(47))には「じゃない」が使えない。これは、話し手、聞き手がともに知っていること、すなわち聞き手の様子については

「じゃない」が使えるが、外見からはわからない聞き手の感情については話し手が想像するしかないので「でしょ」を使うためと考えられる。次のような聞き手の意向を問うたり聞き手に許可を求める聞き手の判断を問う文で「じゃない」が使えないのもこのためと考えられる。

(48) A: 君, 今度の旅行に参加する (\*んじゃない / (ん) でしょ) 。

B: ええ, そのつもりです。

(49) A: 私, 今度の旅行に参加してもいい (\*んじゃない / (ん) でしょ) 。

B: もちろん, いいですよ。

話し手については, 次のような例で言い換えができない。

(50) 私, 疲れているように見える (\*じゃない / でしょ) 。

(51) 私, 今日は静か (\*じゃない / でしょ) 。

聞き手について述べる場合とは異なり, 話し手について聞き手に向かって述べる場合は, 話し手自身の様子を表す表現 (例(50)(51)) には「じゃない」が使えない。これは, 話し手の外観について話し手自身が述べる場合には押しつけの要素が強いため, 「でしょ」を使うのが普通だからだろう。しかし, 話し手の独話なら, たとえば鏡に写る自分を見て「私, 今日は疲れているように見えるじゃない。」という表現が可能である。さらに, 話し手, 聞き手がともに知っていることとして述べる場合にも, 次の例のように「じゃない」が可能になる。

(52) A: あなたは文句が多くてね。

B: 私は今日は朝から何も発言しないで静かじゃない。

話し手自身の感情については, 「じゃない」「でしょ」を使わないのが普通である。しかし, 上の例と同様に, 聞き手も話し手がそうした感情を持つに至ったプロセスを知っている場合には「じゃない」が使える。

(53) (私は) 彼にあんなこと言われてくやしいじゃん。

(54) (私は) 誕生日に彼からプレゼントなんてうれしいじゃない。

「じゃない」「だろ / でしょ」の使い方に以上のような違いが生ずるのは, 「でしょ」にはもともと「だろ」の持つ想像の働きがあるためであり, 「じゃない」は否定叙述形が付加されることでもとの述べ立てをさらに強めているからと考えられる。「だろ /

でしょ」の基本的な意味は「話し手の考えを聞き手に押しつけ、話し手の縄張りを聞き手の縄張りにまで押し広げようとする」ものと考えられる（三枝 2003）<sup>(2)</sup>。一方、「じゃない」は「聞き手の言動、目の前の現実が話し手の考え、予想とくい違う場合に用いられる表現」と考えられる。このように考えると、基本的に「じゃない」では命題内容を話し手、聞き手双方が知っていること、命題内容が双方の対話領域にあることが前提で、「だろ／でしょ」では、話し手、聞き手が共通の対話領域には入っていないと考えられる。

これまで「じゃない」「でしょ」が言い換えられない場合を考えてきたが、言い換えられる場合も実は同じ意味で使われているとは言い難い。次の例は、聞き手について述べたものである。

- (55) 君はあきっぱい（じゃない／でしょ）ゝ。  
 (56) 君は絵が上手（じゃない／でしょ）ゝ。  
 (57) 君はよく働く（じゃない／でしょ）ゝ。

「じゃない」を使った場合には、話し手、聞き手がともに知っていることを述べているが、「でしょ」では命題内容は話し手の考えで、双方の対話領域に入っていない。

話題の対象が第三者の場合、「だろ」「じゃない」のどちらも用いられるが、「だろ／でしょ」を用いると、話し手と彼は親しい間柄にあると考えられる。

- (58) 彼、センスいい（じゃない／でしょ）ゝ。

一方「じゃない」の場合は、話し手、聞き手は、対象に対して同じ位置、立場にたっていると考えられる。次も後者の例である。

- (59) そのボールペン、おもしろい（じゃない／\*でしょ）ゝ。どこで売ってるのかな。  
 (60) A: 会社どこ?  
 B: ○○商事。  
 A: すごい。一流企業（じゃない／\*でしょ）ゝ。  
 B: 中は大したことないよ。

なお、「じゃない」では話し手、聞き手双方が知っていることを前提にしているが、実は聞き手は自覚していない、気付いていないのに話し手が聞き手が知っているものとして述べることもある。その場合は、非難がましくなったり、話し手が自分を正当化

しているように感じられる。

- (61) 私ってきれい好きじゃないですか。だからあの部屋の汚さには耐えられなかったですよ。
- (62) 東京の人って見栄っ張りじゃないですか。

「じゃない」「だろ／でしょ」の構文上の特徴、違いとして次のような点があげられる。

- ① 「の」の有無
- ② 終助詞がつくか否か
- ③ 独立用法の有無
- ④ 独り言で使えるか否か
- ⑤ 相互の接続順序

順にみていく。まず、「田中さんが神戸に住んでいる」ことをいう場合に、上昇調では「の」の有無に関して次の表現がある。

- (63) a. 田中さんは神戸に住んでいるでしょ。
- b. 田中さんは神戸に住んでいるんでしょ。
- \*c. 田中さんは神戸に住んでいるじゃない。
- d. 田中さんは神戸に住んでいるんじゃない。

ここでは「でしょ」と「じゃない」の違い以上に、「の(ん)」の有無の持つ意味が大きいように思われる。すなわち、「の」があると命題内容が客観的なことがらとして述べられるので、命題内容に対する聞き手の判断を問うことになる。それに対して、「の」がない場合は、話し手自身の考えの表出に重きを置いている感じが強い。

上昇、下降調とも「だろ／でしょ」には終助詞が付加しない。一方、「じゃない」は、下降調の場合「いい天気じゃないか／の／よ／さ」と、終助詞が付加する。(ただし、丁寧体の「じゃないです」には「いい天気じゃないですか」と「か」しか付加しない。)また、「だろ／でしょ」「じゃない」には次のように応答の際に独立用法がある。

- (64) A: そのネクタイすてきね。  
      B: だろ(／／)。
- (65) A: 明日の待ち合わせ, 3時?

B: じゃない (ノ/\*)。)

「だろ/でしょ」「じゃない」は叙述性があるため、独立用法が可能だと考えられるが、「じゃない」は上昇調の確認用法でしか用いず、「だろ」は上昇調でも下降調でも可能である。さらに、「じゃない」は「これって間違ってるじゃない。」「私、手紙出すの忘れてるじゃない。」と、独り言でも用いられる。「だろ/でしょ」が常に聞き手に向かって発話されるのに対して「じゃない」は、聞き手への働きかけを必ずしも必要としないと言える。また、「だろ/でしょ」「じゃない」は相互に接続するが、その順番は次の例に見るように常に「じゃない」が先である。

- (66) 宴会のお終いの頃でしたから、湯本さん、もう酔ってたんじゃないでしょうか。  
(ユタ)

以上をまとめると、「だろ/でしょ」「じゃない」とも独立用法がある点で叙述性が認められるが、「だろ/でしょ」には終助詞が付加しないこと、対者性が強いこと、「じゃない」には終助詞がつき、独り言でも用いる点、また相互の接続の仕方から、「だろ/でしょ」の方が終助詞性が強く、下降調の「じゃない」はより叙述内容に近い性格を持っていると言える。

#### 4. 下降調の「じゃない」と他の終助詞との違い

下降調の「じゃない」は意味的には「ね」「よ」に近いように思われる。しかし、次の例に見るように明らかに用法は異なる。

- (67) <Bさんのアパートを訪れて>  
A: わあ、すてきな部屋。  
B: そう? でも狭いんだ。  
A: 新しいし、眺めもいいし、いいアパート (\*ね/じゃない) 。
- (68) <前を歩いている人に>  
あ、何か落ちた (よ/\*じゃない) 。
- (69) A: どの本がいいでしょうか。  
B: この本がおもしろい (ですよ/\*ではないですか) 。
- (70) A: 明日の会議には出ます。  
B: だめ (よ/\*じゃない), 無理しちゃ。

〈翌日〉

A：熱があったけど出てきちゃいました。

B：だめ（よ／じゃない）、無理しちゃ。

(71) その帽子すてき（ね／じゃない）↘。

(72) 風間さんが殺された（よ／じゃない）↘。

「ね」「よ」と「じゃない」の意味を較べると、「じゃない」の場合は話し手、聞き手は命題内容に対して事前に知識を持っていることがわかる。(71)は日常的にはどちらも使われるが、「すてきじゃない」には話し手の驚き（すなわち前提とのずれ）が感じられる。「じゃない」に「よ」は付加されるが、「ね」「よね」は付加されない。「ね」は基本的に聞き手の同意をもとめるもので、これは予想とのずれがあることで自身の主張を強めたいがために用いる「じゃない」と両立しないためと考えられる。その点、聞き手が知らないこと、気付いていないことを知らせる、気付かせる「よ」とは両立すると考えられる。

## 5. まとめ

本稿では文末で終助詞的に使われる「じゃない」の意味、用法をみた。「じゃない」は、聞き手の言動、目の前の現実が話し手の考え、予想とくい違うことを意味する。用法としては、イントネーション、「の」の有無から大きく、確認、強め、気付かせの三つがあげられる。「だろ／でしょ」「じゃない」はともに叙述性があり、言い換えられる場合も多い。しかし、聞き手の感情、話し手の様子を表現する場合には「じゃない」が使えないなど、いくつか制約がある。この違いが生じるのは、「でしょ」にはもともと「だろう」の持つ想像の働きがあるためであり、「じゃない」は否定叙述形が付加することでもとの述べ立てをさらに強めているからである。「じゃない」を使った場合には、話し手聞き手がともに知っていることを述べているが、「でしょ」では命題内容はそうした対話領域に入っていないと考えられる。

## 注

1. 白川博之（1995）「タラ形・レバ形で言いかす文」『広島大学日本語教育学科紀要』第5号、（1995）「理由を表さない「カラ」」仁田義雄編『複文の研究（上）』くろしお出版

2. 「だろ／でしょ」「じゃない」の違いについては三枝（2003）の考えに修正を加えた。

### 引用文献

「シコふんじゃった」：『92年鑑代表シナリオ集』映人社

「ユタ」：内田康夫『ユタが愛した探偵』徳間文庫

「蜃気楼」：内田康夫『蜃気楼』講談社文庫

### 参考文献

庵功雄 2001『談話・テキストレベルの文法知識の習得を目的とした文法教材の開発』平成11～12年度文部省科学研究費報告書

神尾昭雄 1989「情報のなわ張りの理論と日本語の特徴」井上和子編『日本文法小事典』

三枝令子 2003「「だろう」の意味と働き——助動詞から終助詞まで——」『一橋大学留学生センター紀要』6号

田野村忠温 1988「否定疑問文小考」『国語学』152

鄭相哲 1994「所謂確認要求のジャンイカとダロウ——情報伝達・機能論的な観点から——」『現代日本語研究』1

鶴田庸子 1997「ジャンイデスカの発生と不快さについて」『言語文化』第34巻 一橋大学語学研究室

仁田義雄 1989「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』くろしお出版

益岡隆志 1991『モダリティの文法』くろしお出版

御園生保子 2000「文末に現れるジャンイの用法と韻律の分析をめぐるものだいについて」『日本語 意味と文法の風景——国広哲弥教授古稀記念論文集——』ひつじ書房

三宅和宏 1996「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』69号

宮崎和人 1996「確認要求表現と談話構造「～ダロウ」と「～ジャンイカ」の比較」『岡山大学文学部紀要』25

2002「確認要求」『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版

蓮沼昭子 1995「対話における確認行為 「だろう」「じゃないか」「よね」の確認方法」仁田義雄編『複文の研究（下）』くろしお出版